様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１３１７

研究課題名（和文）発達障害や学習困難をもつ小中学生の認知的個性を活かす特別支援の方策に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Measures of Special Support Making Use of the Cognitive Individuality of Students with Developmental Disorders or Learning Difficulties

研究代表者
松村　暢隆（MATSUMURA, Nobutaka）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：７０１５７３５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円、（間接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：　発達障害や学習困難のある児童生徒について、広義の２Ｅ教育の観点から、得意や興味等の「認知的個性」を捉えて、それを活かして苦手を補う特別支援の方策を探った。認知的個性の自己チェックリストを開発して、それが通常学級の学習で有用なこと、また発達障害や学習困難な生徒の学習・生活支援に活用できることを示した。併せて、２Ｅ教育の多様な形態や可能なカリキュラムの変革について調査、考察した。

研究成果の概要（英文）：　We investigated the measures in special support to identify the "cognitive individuality" as strength and interest and to compensate for the weakness making use of them in the students with developmental disorders or learning difficulties from the perspective of the broad concept of twice-exceptional education. We have developed self-rating checklists of cognitive individuality and showed that they are useful for the learning in regular classes and that they can be made use of in supporting the learning and life of students with developmental disorders or learning difficulties. Furthermore, various types of twice-exceptional education and the possible innovation of the curriculum were investigated and considered.

研究分野：認知発達・教育心理学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：発達障害　学習困難　才能　認知的個性　２Ｅ教育　多重知能（MI）

１．研究開始当初の背景

アメリカでは、発達障害と才能を併せもつ「２Ｅの（二重に特別な）」児童生徒の教育実践研究が盛んである。この背景には、学校での「才能教育」は、才能をもつが通常授業には不適応の子どもの学習ニーズに応じる特別支援教育の一環だとする考え方がある。しかし日本では、発達障害に関する研究の豊富さに比べて、才能とその教育に関する教育学・心理学的研究は、一つの研究領域として形成されてこなかった。本研究では、特別支援教育、認知・発達心理学、比較教育学の学際的領域として、新たな多面的な知見を得ようとした。

２．研究の目的

個人のもつ障害や才能も含めて多様な認知発達的特徴・個人差を、「認知的個性」（CI）という包括的な概念で、また発達障害生徒の得意・興味を活かす特別支援を広義の２Ｅ教育として、捉え直す。通常学校及び特別支援教育の様々な学習・発達支援の場において、発達障害や学習困難のある生徒の CI を判別して、学習を個性化する方策を探る。

(1) CI の観点から、発達障害や学習困難のある生徒を含めて、MI（多重知能）から生活スキルまで、個人の得意や興味を捉えるために、チェックリスト等多様な方法を開発する。

(2) 学習・発達支援の場において、判別された CI を活かす学習や生活支援の方法を開発・試行して、学習困難な生徒の才能特性を活かして、苦手を補い、自己肯定感を高めるような、学習支援の方策および２Ｅ教育やカリキュラムの多様なあり方について提言する。

３．研究の方法

認知的個性(CI)と広義の２Ｅ教育という包括的概念の下、発達障害や学習困難と才能（得意・興味）に関する判別と学習・生活支援に関して、多方面の視点から基礎的調査、資料収集、活用的実践研究を行った。

(1) 中学校の総合学習や教科学習で生徒の CI を把握して活かす実践を進めた。MI（多重知能）や同時・継次処理等の簡易チェックリストを作成した。それを用いて発達障害生徒の学習支援を試みた。また発達障害生徒の CI を活かすキャリア教育の多様なあり方を探るため、アメリカの発達障害生徒の大学進学指導を重点とする特別学校および発達障害学生の学習支援を行う大学への訪問・資料収集を行った。

(2) 発達障害児の知能検査･WISC-IV のプロフィールと、CI 特性のうち MI プロフィールの結果を比較して、MI プロフィールの妥当性を検討した。

(3) 保育士研修で、発達障害児担当の保育士を対象とした研修プログラムを実施した中で、保育士が CI 特性を念頭に、担当児のアセスメントと行動観察を行う機会を設定した。また短期入所施設支援において、ASD 児を対象とした入所支援のモデルケースを通して支援方法を検討し、支援の効果検証を試みた。

(4) 組織開発・変革論として、認知的個性のうち「強み」の発見・活用を促すための方策が欧米を中心に模索され始めている。そのポジティブ・アプローチの観点から、通常学級で、学校に基礎を置く持続可能な才能教育カリキュラムの開発方法の文献研究と実証研究に取り組んだ。

(5) 公的な才能教育で発達障害児等特別支援教育対象者への制度的配慮が関連法に明記されている韓国を対象に、２Ｅ教育の現状と課題を調査・分析した。才能教育機関を事例分析して、教育現場での２Ｅ児に対する制度的配慮について検討した。

４．研究成果

総合的な研究の検討の過程で、発達障害や学習困難のある生徒を含めて、全ての生徒個人の得意・興味と苦手を「認知的個性」（CI）の観点から捉え直し、広義の２Ｅ教育として、発達障害生徒の得意・興味を活かす学習・生活支援の有効な方針が得られた。

(1) 中学校で CI を授業に活かすために、生徒の MI や同時・継次処理タイプをチェックリストで判別することは比較的容易で妥当であることが示された。その個人の結果を総合学習の小集団形成や教科授業の方法の工夫に有効に活かせた。これらに関連した授業実践の報告書冊子を作成した（松村暢隆監修・香川大学教育学部附属坂出中学校『認知的個性を活かす総合学習・教科学習の実践』2014)。一方、CI チェックリストを活用して、ASD 等の発達障害生徒の興味を活かす学習支援が可能なことが示された。

さらに、アメリカでの発達障害生徒対象の特別学校および発達障害学生の学習支援を行う大学センターの実践に関する調査から、広義の２Ｅ教育の理念・方法で日本の発達障害生徒の CI を活かすキャリア教育の多様なあり方への示唆を得た。

今後、中学校の総合学習や教科学習で生徒の CI を活かす実践をさらに進め、CI 特性の指導・学習での活用法と有効性を探究する。またアメリカの特別学校での発達障害生徒の大学進学指導の方法を参考に、日本でも広義の２Ｅ教育の理念で、発達障害生徒の得意・興味を活かして苦手を補う指導・学習の可能性を探究する。

(2) 発達障害児の WISC-IV プロフィールと MI プロフィールの結果を比較したところ、後者で個人の発達の凸凹の得意な機能を識別できることが分かった。その方法は、発達障害児の得意を活かす支援に有効であると示唆された。

今後は、これまでの成果を基に、発達障害や学習困難のある児童生徒が自分の得意を理解して活かすために、MI プロフィール等を用いた心理教育プログラムを開発し、実践研究を進める。

(3) 保育士が、CI 特性を考慮することにより、アセスメントを通して担当児の発達プロフィールを把握して支援の手掛かりを得られること、また詳細な観察記録に基づいて担当児の得意な領域を見極め、支援に活かせることが分かった。短期入所施設支援においては、対象児の興味等を把握して活かすことにより、社会・生活スキルの改善がみられ、養育者の抑うつ感や育児ストレスが軽減されることを示した。

今後は、保育士研修について、発達障害児担当の保育士が、担当児の発達プロフィールを把握し、その変化を捉えられるアセスメント及び評価の方法を検討する。また短期入所施設支援について、子どもが得意や好む活動を活用し、日常生活や対人関係においてポジティブな経験を積み重ねられるような支援方法を検討していく。

(4) ポジティブ・アプローチが、通常学級で、学校に基礎を置く持続可能な才能教育カリキュラムの開発に有効な方法であることが分かった。ポジティブ・アプローチは社会構成主義の影響を強く受けた方法論であり、客観主義的認識で捉えられがちな CI や才能もまた社会的に構成されるものと見直すことができる。

今後は、カリキュラムを介した子どもの学びの姿のポジティブな現実に積極的な意味づけをして、オルタナティブな物語を紡ぎだすことで教師の生徒を見る目は変わり、カリキュラムもまた変革が促される、との理論的予測が、実際の場でどのように機能するのかについて実証研究を展開する。

(5) 韓国では、才能教育を特別支援よりも人的資源開発の一環と見なす傾向が強く、特別支援教育と才能教育の法制度的な連携は十分とはいえないが、研究者や教育関係者の一部では、両者の連携を図る試みがなされていることが分かった。また、才能教育の目的が科学者養成に偏重していて配慮方法が形式的なこと等から、教育現場では２Ｅ児に対する制度的配慮が十分に機能していないことが判明した。

特定分野の人的資源開発という目的は確かに才能教育の制度化における政策的インセンティブとなり得る。しかしそれを重視し過ぎれば才能教育制度が硬直化し、より多くの子どもの多様な才能を活かすことが困難になることが、韓国の事例分析から明らかになった。この２つの目的のバランスをとるための方策を探っていくことが今後の課題である。

以上のような研究の進展、成果を踏まえて、研究者の関連論文を集結して本科研の報告書冊子を作成した（松村暢隆編集『認知的個性を活かす特別支援の基礎・実践的研究：２Ｅ教育の理念で生徒の得意・興味を活かして苦手を補う』2014）。今後、様々な障害や才能のある生徒を含めて、全ての生徒の「得意・興味を見つけて伸ばし、活かして苦手を補う」という広義の２Ｅ教育の理念の下、小中学生から高校生、大学生に対して、CI を活かす学習支援を連携させることに関する基礎・実践的研究が継承発展される。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 20 件）

① 岡田香織・森裕子・能島頼子・小島里美・天野美鈴・小倉正義（以下 3 名）　発達障害児の発見における５歳児健診の有用性－就学前までのフォローアップを通して－、児童青年精神医学とその近接領域、査読有、55 巻 1 号、2014、15－31

② 竹澤大史（以下 3 名）　発達障害のある子どもを担当する保育士を対象とした研修プログラムの開発、名古屋女子大学紀要、査読無、60 号、2014、135－144

③ 緩利誠　カリキュラム開発におけるポジティブ・アプローチの展望と課題－ギャップ・アプローチとの対比を中心に－、浜松学院大学教職センター紀要、査読無、3 号、2014、71－93

④ 松村暢隆　発達障害生徒の才能を活かす高度な特別支援－アメリカの特別学校キングズベリ校の実践から－、関西大学文学論集、査読無、63 巻 2 号、2013、71－94

⑤ 松村暢隆　発達障害学生の才能を活かす学習支援－アリゾナ大学ソルトセンターの実践から－、関西大学文学論集、査読無、63 巻 1 号、2013、133－153

⑥ 福元理英・森裕子・森本なつ美・岡田香織・小倉正義（以下 2 名）　小学校低学年児童における人物画知能検査(DAM)の特徴－標準化資料との比較および性差を中心に－、心理臨床学研究、査読有、31 巻 5 号、2013、850－855

⑦ 加藤大樹・小倉正義（以下 3 名）　高機能広汎性発達障害のある中高生のグループ活動における協同ブロック制作の試み、金城学院大学論集・人文科学編、査読無、10 号、2013、19－24

⑧ 大隅香苗・小塩真司・小倉正義（以下 3

名）　大学生新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討、青年心理学研究、査読有、24 巻 2 号、2013、125－136
⑨ 竹澤大史　ペアレント・メンター－日本とアメリカの活動の紹介－、アスペハート、査読無、12 巻 1 号、2013、50－55
⑩ 竹澤大史・飯田沙依亜・幸順子　短期宿泊型の親子支援プログラムの効果測定の試み、名古屋女子大学紀要、査読無、59 号、2013、207－215
⑪ 石川裕之　韓国における才能教育と学校教育制度、教育と医学、査読無、61 巻 7 号、2013、12－13
⑫ 石川裕之　才能教育先進国の取り組み（12）韓国編（下）－韓国の才能教育の現状と課題－、週間教育資料、査読無、1238 号、2013、22－23
⑬ 松村暢隆　認知的個性を活かす２Ｅ（二重の特別支援）教育－発達障害と才能を併せもつ子どもの支援－、LD 研究、査読無、21 巻 2 号、2012、193－200
⑭ 緩利誠　学校教育における知能検査の利用、浜松学院大学教職センター紀要、査読無、1 号、2012、81－104
⑮ 石川裕之　才能教育先進国の取り組み（11）韓国編（上）－公的な性格が強い韓国の才能教育－、週間教育資料、査読無、1235 号、2012、22－23
⑯ 石川裕之　韓国の才能教育事情、比較教育学研究、査読無、45 号、2012、37－51
⑰ 松村暢隆　中学生の異学年合同総合学習に活かす MI（多重知能）－クラスター編成資料となる自己評定尺度の開発－、個性化教育研究、査読有、3 号、2011、12－20
⑱ 松村暢隆　すべての子どもの個性を活かす才能教育、教育と医学、査読無、59 巻 6 号、2011、78－86
⑲ 田中裕子・福元理英・岡田香織・小倉正義（以下 2 名）　軽度発達障害分野における治療教育的支援事業『にじいろプロジェクト』の取り組み－特別支援相談室「にじいろ教室」の実践報告と今後の展望－、名古屋大学大学院教育発達研究科紀要（心理発達科学）、査読無、58 号、2011、93－103
⑳ 石川裕之　韓国の教育制度と入試政策、韓国語ジャーナル、査読無、38 号、2011、29

〔学会発表〕（計 23 件）
① 竹澤大史・幸順子　育てにくい子どもと発達障害児の地域における育児支援－ピア・グループサポート参加者へのインタビュー調査から－、日本発達心理学会第 25 回大会、2014 年 3 月 23 日、京都大学
② 小倉正義（以下 3 名）　広汎性発達障害児を対象とした心理教育プログラム「視点の変え方」の実施と効果の検討、第 110 回日本小児精神神経学会、2013 年 11 月 8 日、名古屋：テレピアホール
③ 松村暢隆　発達障害学生の認知的個性を活かす学習支援－アリゾナ大学ソルトセンターの実践から－、日本 LD 学会第 22 回大会、2013 年 10 月 13 日、パシフィコ横浜
④ 松村暢隆　才能を活かす特別教育の現在（公開シンポジウム・アメリカにおける進歩主義教育実践の現在）、アメリカ教育学会第 25 回大会、2013 年 9 月 28 日、東京：上智大学
⑤ 松村暢隆　発達障害のある子どもの才能を活かす教育、大田原俊輔追悼記念国際シンポジウム（招待講演）、 2013 年 9 月 22 日、岡山大学
⑥ 竹澤大史・塩田心　発達障害児の保育における研修プログラムの開発（3）－保育士効力感及び保育士ストレスの変化に着目して－、日本心理学会第 77 回大会、2013 年 9 月 19 日、札幌コンベンションセンター
⑦ 石川裕之　個人的経験から見た比較教育学と韓国研究（ラウンドテーブル 3・比較教育学と韓国研究－方法論と課題－）、日本比較教育学会第 49 回大会、2013 年 7 月 8 日、東京：上智大学
⑧ 緩利誠　カリキュラム開発におけるポジティブ・アプローチの展望と課題－ギャップ・アプローチとの対比を中心に－、日本カリキュラム学会第 24 回大会、2013 年 7 月 7 日、新潟：上越教育大学
⑨ 幸順子・竹澤大史　育てにくい子どもと発達障害児の地域における育児支援－保護者主体の支援を支える専門家のあり方を考える－、日本発達心理学会第 24 回大会、2013 年 3 月 15 日、東京：明治学院大学
⑩ 石川裕之　韓国の教育熱と家族のかたち－早期留学の問題を中心に－、国際シンポジウム・多様化する家族の肖像－グローバル化と韓国社会の変容－、2013 年 1 月 12 日、東京：獨協大学
⑪ 小倉正義　発達障害研究と支援の最前線－脳科学，医学，心理学の研究知見を教育へ活かす－（自主シンポジウム）、日本教育心理学会第 54 回総会、2012 年 11 月 24 日、沖縄：琉球大学
⑫ 吉川徹・加藤香・小倉正義・大沢佑輝・竹澤大史（他 2 名）　専門家等によるペアレント・メンター活動支援システムに関する予備的研究、第 53 回日本児童青年精神医学会総会、2012 年 11 月 1 日、東京：都市センターホテル
⑬ 松村暢隆　発達障害児・者のいいところを活かす（自主シンポジウム 7・発達障害児・者の適応的な社会生活に向けて－いいところさがしを支援の軸に－）、日本 LD 学会第 21 回大会、2012 年 10 月 7 日、宮城教育大学
⑭ 小倉正義　障がい児の保護者の学校への関わりに影響を及ぼす要因、日本心理臨床学会第 31 回秋季大会、2012 年 9 月 15 日、愛知学院大学

⑮ 竹澤大史・塩田心・玉井一男　発達障害児の保育における研修プログラムの開発（2）－保育士効力感、保育士ストレス、支援方法の実用感に着目して－、日本心理学会第 76 回大会、 2012 年 9 月 11 日、東京：専修大学

⑯ Fukumoto, R., Tanaka, Y., Okada, K., Suzuki, M., Ogura, M. (& 2 others) The need for support by teachers and parents of children with learning difficulties. 20th World Congress of International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, 2012 年 7 月 24 日、Paris, France: Palais des congrs PARIS

⑰ Yamawaki, A., Ogura, M. (& 4 others) Frequency of Internet usage among Japanese junior high school students and the relationship between Internet addiction and the strength and difficulties questionnaire. 20th World Congress of International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, 2012 年 7 月 23 日、Paris, France: Palais des congrs PARIS

⑱ 松村暢隆　発達障害のある子どもの認知的個性を活かす、富山大学研究推進事業・障害とその代償性潜在能力の生命融合科学的研究－いいところさがしを支援の軸に－（招待講演)、2012 年 5 月 19 日、富山大学

⑲ 幸順子・竹澤大史　育てにくい子どもと発達障害児の地域における育児支援－現状と課題について考える－、日本発達心理学会第 23 回大会、2012 年 3 月 9 日、名古屋国際会議場

⑳ 松村暢隆　認知的個性を活かす２Ｅ（二重の特別支援）教育（招待講演)、日本 LD 学会第 20 回大会、2011 年 9 月 19 日、東京：跡見学園女子大学

㉑ 山崎志野・竹澤大史　発達障害児の保育における研修プログラムの開発（1）－公立保育所における実践－、日本心理学会第 75 回大会、2011 年 9 月 16 日、東京：日本大学

㉒ 小倉正義　A 県自閉症協会が主宰する社会的スキル訓練の実践、日本自閉症スペクトラム学会第 10 回研究大会、2011 年 9 月 11 日、名古屋国際会議場

㉓ 小倉正義　高機能広汎性発達障害の中学生のグループ活動－保護者並行参加型のソーシャルスキルトレーニング－、日本心理臨床学会第 30 回秋季大会、2011 年 9 月 4 日、福岡国際会議場

６．研究組織

(1)研究代表者

松村　暢隆（MATSUMURA, Nobutaka）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：７０１５７３５３

(2)研究分担者

小倉　正義（OGURA, Masayoshi）
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・講師
研究者番号：５０５０８５２０

竹澤　大史（TAKEZAWA, Taishi）
愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所・教育福祉学部・研究員
研究者番号：８０３９３１３０

緩利　誠（YURURI, Makoto）
浜松学院大学・現代コミュニケーション学部・准教授
研究者番号：８０５０９４０６

石川　裕之（ISHIKAWA, Hiroyuki）
畿央大学・教育学部・准教授
研究者番号：３０５１２０１６

(3)連携研究者

石隈　利紀（ISHIKUMA, Toshinori）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
研究者番号：５０２３２２７８